

東京バッハ合唱団 月報

[第734号] 2023年8月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101

Tel: 03-3290-5731 Fax 専用: 03-3290-5732 郵便振替: 00190-3-47604

Mail: office@bachchor-tokyo.jp http://bachchor-tokyo.jp

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.734

August 2023

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

MAGNIFICAT (マニフィカト) のこと

大村 恵美子 (主宰者)

私たちが、次の公演にそなえて現在練習している曲のタイトルは“Magnificat”と記されていますが、ラテン語から一般化されたこの語は、英・仏・独などでは、どう発音されているのでしょうか (意味は「崇める」、わが魂 主をあがめ…、聖母マリアの頌歌・讃歌)。

手許のそれぞれの小さい辞典で引いてみると；

・英 Magnificat … マグニフィカト、マーニフィカート [いずれも、発音記号を近似的にカナ表記、筆者]

・仏 Magnificat … マグニフィカト (辞書の表記)

・独 Magnificat … マグニフィーカト (カナ表記、筆者)

いずれも、mag のところは、g を読んで「グ」と発音し、「マグニフィカト」と聞こえるようです。もちろん、どの国でも fi は「フィ」と上歯・下唇を合わせるので「ヒ」にはならない。したがって日本語カナ表記でも「マグニフィカト」と書いてあり、ただし、末尾の t を無声音に近く、子音だけで、マグニフィカ「トゥ」と聞こえるのが正解に近いでしょう。

ところで、カナ表記にする場合、「マ・グ・ニ」とすると「グ」が強く響きすぎるので「マンニフィカト」でよいのか? 「ニ」にアクセントをおくために、「ニー」とのぼして「マニーフィカト」(最後の軽い「ト」は「カット」「カトゥ」……等にしないでよいか?) と書くことも出来そうです。これに異論の方は、ご説を伺わせてください。

内容のことになりますが、私が若い時期に最長期間留学していたのはフランスで、そこではマニフィカトの形容詞は「マニフィック」で、辞書にもある「見事な・壮麗な・堂々たる・雄大な・素晴らしい」と、大きいとかりっぱという感じのものばかり。ドイツでは、大学学長の尊称「学長閣下」を Magnifizenz (マグニフィツェンツ) というそうです。

「セ・マニフィック!」と心から動かされてほめるのを、フランスで度々聞きましたが、辞書によると、「ぎょうぎょうしい」「尊大な」「大きく出たな」など、悪口っぽい意味合いにもけっこう多用されるようです。そんなややこしい場面には、私は経験がなく、いつも「マニフィック!」の声は、心をこめた「ほめ言葉」と受けとめていました。

一般に、ラテン語から自国語に取り入れて俗な使い方をする単語は、こういう、影ではせせら笑いをして



■夏の花々、①あじさい (写真: 千葉光男)

いるような、善悪 2通りの形容に転化するものが多いようです。ご注意ください!

さて、バッハの作品《マニフィカト》には2つの稿が残されています。変ホ長調の第1稿とニ長調の第2稿です。ライプツィヒ移住初年のクリスマス (1723年12月、今年が300年目!) 用に作曲・構成されたのが第1稿 (BWV 243a) で、古来のマニフィカト (マリアの讃歌) の歌詞全編への作曲に加えて、この中にクリスマスのための教会歌が4曲挿入されていました。

10年ほど後、1733年(?)の「マリアのエリサベト訪問」の祝日 (毎年7月2日) のために、調を半音下げてニ長調とし、楽器編成も入れ替えて上演した稿が第2稿 (BWV 243) で、音楽的により完成度の高い稿として、今日の演奏では一般的です。こちらはクリスマス用ではないので挿入曲を含みません。

これまでに、私たちは《マニフィカト》を5回の定期演奏会で取り上げてきました (1972、91、93、2002、14年) が、いずれも12月公演ではあっても、どの稿か、挿入曲付きか否か、挿入曲のみか、など、残念ながら手掛かり不足で軽々には確定できません。少なくとも2002年の第92回定演 (40周年記念Ⅱ、石橋メモリアルホール) では、「マニフィカト (243, 243a)、他に BWV 61」と、記録にも付記があり、団員用の使用楽譜も残っていたので確認できました。

より魅力的な「ニ長調」稿 (BWV 243) に、「変ホ長調」稿 (243a) の挿入曲を、半音低く移調して配置したものです。今回もこれです。(歌詞参照、p.3脚注◆より)

月報 2023年8月号 CONTENTS

- ・ <終了報告> バッハ“超入門”企画 (林 貞敬) …p. 2
- ・ 61周年祝会、オルガンとチェロ (風岡和子) …p. 2-3
- ・ 連載: 退屈するのはいそがしい [30] (大野博人) p. 4

<終了報告> レクチャーコンサートとワークショップ “超入門”バッハの聴き方、歌い方

林 貞敬（団員）

2023年5月20日、日本キリスト教団荻窪教会を会場として〈レクチャーコンサートとワークショップ2023〉がおこなわれました。杉並区からは後援名義を頂き、杉並区内の地域区民センター、集会所、図書館、区役所等、区内20カ所の公共施設にチラシを配架して頂きました。

指揮：大村恵美子のもと、ソプラノ：光野孝子、オルガン：田尻明葉、室内楽：管弦楽団ARS有志の皆さん15名、合唱団員26名、来聴者数48名、総勢100名余の参加者で、催し物が行われました。

当日の事業内容及び参加者の反響等

バッハ音楽の日本語演奏と解説により、テキストを理解して頂き、共に歌うことを通して、バッハの音楽を心の底から楽しんで頂く目的で実施しました。

はじめに、演奏者の紹介、企画の趣旨、コロナ対策も含む会場の説明に引き続き、会場である荻窪教会牧師の挨拶がありました。

第一部〈レクチャーコンサート〉“初めてバッハを聴く人に向けて”では、日本語演奏の意味、楽曲の成立の背景、物語、演奏形態、楽器の配置などについて解説が曲目ごとに行われ、東京バッハ合唱団の演奏でバッハカンタータ《BWV 12》と《BWV 22》より、特別ゲスト光野孝子先生の参加によって《BWV 11》からは独唱アリアも加わって、オーケストラ付きでの日本語演奏が行なわれました。

第二部〈ワークショップ〉“簡単なバッハを日本語で歌ってみる”では、合唱が初めての方も共に歌えるように、ベテラン団員の指導で、コラール「神のみわざこそ」BWV 12-7、「イエスわが喜び」BWV 147-10を練習しました。“まとめ”として、聴衆も参加しての「超入門・祝祭合唱団」（参加者の皆さん＋東京バッハ合唱団）全員で、覚えただけの2曲を合唱、フィナーレをかざりました。

ご来場者の感想として、「初めてだったがバッハの音楽をオケと一緒に歌えて楽しかった」、「近所でこのような催し物が今後も開催されると嬉しいと思う」、「区民センターでもらったチラシを見てきたが、参加してよかった」等々の前向きな感想を頂きました。客席が



◆月報バックナンバーは、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/monthly_newsletter/index.htm

一杯となってしまうほどに多くの方が会場に集まって下さり、参加者のお住まいも、近郊の色々な地域に広がっているという予想外の大きな反響に、東京バッハ合唱団としても大変嬉しく思います。

YouTube ■第122回定演演奏会(5/6)、■レクチャーコンサートとワークショップ2023(5/20)、いずれも公開中。“Youtube 東京バッハ合唱団”でアクセス。

荘厳なオルガンの響き、華麗なチェロのテクニック —創立61周年記念祝会報告—

風岡 和子（団員）

「地獄は無いのよ。あるのは天国だけ。そこに近づくのはなんてハッピーなこと」と、大村先生はのたまう。なるほど。晩年になっても枯れなかったデビッド・ボウイ、アンリ・マティス、徳田秋声、瀬戸内寂聴（最近、野見山暁治も仲間入り）らは皆そういう心持ちで制作を続けたのか。

「創立61周年をお祝いして」と合唱団最古参のKさんの発声とウーロン茶での乾杯。「数年前、クリスマス・オラトリオのリハーサルでは、何事かと警察が駆け付けて」と荻窪教会の小海先生。[3本のトランペットにティンパニーも加わっての大音響に]いつも快く教会を練習場所にご提供くださり、「荻窪教会をライブツイッヒの聖トーマス教会のように」というのがかねてからの念願。「昨年の60周年記念演奏会の147番は本当に感動した」とは後援会員のHさんの言葉。「健康にはくれぐれも気をつけて合唱団を続けてほしい」とご親族のNさん。お若い頃団員で現在は岩手県の政治に携るMさんは、小海先生が月報7月号で紹介されている《バッハ所蔵のカロフ聖書》ファクシミリ版をご自分でも手に入れられたとか。お連れの方Sさんは皆川達夫教授の薫陶を受け、アカデミアミュージックにお勤めだったという。「練習中叱られてばかりでもバッハの合唱は楽しい」と誰もが口には出さないことをあっさり告白したのは団員のMさん。荻窪教会員のYさんは「オルガン演奏や合唱など音楽活動に熱心に取り組むこの教会をもっと広めていきたい」と。最近の演奏会でご一緒するARSのTさんは「野尻湖合宿は本当に楽しかった。またぜひ」と言いつつご子息周さんの演奏を控えてソワソワ。オーボエ奏者ではなくパパの顔になっていた。「娘が小さいころ、台の上ののって一緒に歌った」「家内は今でもソプラノで歌っている」とおっしゃるのは後援会員のOさん。「ご主人もバスカテノールでどうか」と大村先生に誘われ「口が小さいもので……」とご遠慮気味だった。

「パイプオルガンは楽器自体が音を出すのではなく、それぞれのパイプに送り込まれた空気が響きを作り出し空間を満たして成立する」という演奏者田尻さんの

説明に一同納得。合唱と同じだから。イタリアはアンドレア・ゼーニ制作、2段の手鍵盤と足鍵盤、ストップ数10、金属と木製のパイプの総数448本から奏でられるブクステフーデのプレリュードはなんと荘厳で豊かな響きを私たちに届けてくれたことか。重厚なペダルソロから始まり、違う音色のストップを加えながら、クライマックスは全ストップを駆使して、このオルガンの魅力を最大限に引き出した。私たちは初めてこのオルガンの本格的な演奏を耳にして圧倒され深く感動した。この8月にはゼーニ氏が来日し、ピッチをバロックからモダンへと整音するので、9月からはこのオルガンの伴奏で練習ができる。楽しみなことだ。



■オルガン独奏：田尻明葉さん
(撮影：千葉光男、下写真とも)

続いてチェロの演奏。「リゲティって誰？」と思った人もいたのでは。名前は聞いたことがあっても、作品を聴くのは初めてだった。全体は2つの楽章からできていて、作曲当初は知人の女性チェリストのために書かれた単独の小品だったが当の女性に顧みられず、やがて数年後有名な女性チェリストの依頼で技巧的な2楽章が作曲された。まこと女性のパワーはすごい。この2楽章は《カプリッチョ》と題されている。カプリッチョとは奇想曲と訳され、イタリア語のももとの意味は「気まぐれ」とか「わがまま」。しかし演奏者周さんの目にも止まらぬ眩いばかりの華麗なテクニックはそうした言葉の意味を完全に乗り越えて、度肝を抜かれた人は多かったのではないだろうか。若くて自由奔放で天翔ける音の世界。「これを4日後のコンクールで……」と少し緊張した面持ちの周さん。頑張っ

さてトリをつとめたのは団員の合唱3曲。今練習中の《マニフィカト》からの1曲「よるこび歌え」は大村先生がこの日のために、クリスマスにちなんだ歌詞の一部分を書き換え、こうしたイベントの時はいつも歌うようにしたいとのこと。団員へのプレゼントの歌集もぜひ皆で歌うチャンスを作りたい。

[了]

■チェロ独奏：椿周さん



＝後援会員のみなさまからのお便り＝

「思いがけない素敵なプレゼント」、孫と歌います

長井 しのぶ（山口市、元団員）

恵美子先生、

東京バッハ合唱団、創立61周年、おめでとうございます。素晴らしい記念祝会のひとときをお楽しみになったこととお喜び申し上げます。

このたび、思いがけない素敵なプレゼントをお送りくださり、誠にありがとうございます。小さな愛らしい一冊のなかに、なんと多くの歌と絵と豆知識がびっしり詰まっていることでしょう！知らない歌もたくさんありましたが、1頁1頁最後まで、調子外れでも一所懸命歌ってみて、何十歳も若返ったような気になりました。ずっと、歌うことを忘れていました。

これからはこの歌集を傍らに置き、ときどき歌いたいと思います。こんど孫と会うとき、「一緒に歌おう」と持参するつもりです！……

* * *

浜島 和子（札幌市）

……祝会に参加できませんでしたのに、皆さんの歌声が聞こえてくるようです。送っていただいた『歌はともだち』は食卓にあって大活躍中です。出なくなっている声が、少しは出ているかと思ひながら……

* * *

清田 礼子（神奈川県大和市、元団員）

……途中までしか口ずさめなかった懐かしい歌の数々を開けば、譜面もあって終わりまで歌えて、なんて楽しく心あたためられることでしょう。

先生の今もお元気な合唱指導のお姿に感動いたします。いつも月報も楽しく拝読しております……

* * *

西村 清志（小樽市、元団員）

……6歳になったばかりの孫が来たとき、一緒に歌える歌が意外になくて、改めてトシの差を感じさせられてしまうのですが、『歌はともだち』の中の曲なら何曲か歌えそうな気がします。今度の連休に来ることになっているので楽しみです。

創立記念会の方はいかがでしたか。月報でその雰囲気を楽しみたいと思います……



■夏の花々、②ビヨウヤナギ（写真：千葉光男）

◆上演用歌詞対訳は、当団HPからご覧いただけます。
http://bachchor-tokyo.jp/japanese_words/index.htm

<連載随想>

退屈するのはいそがしい [30]

夏が来れば…



安曇野閑人 大野 博人

東京からはちょっと遠いけれど、極楽にはけっこう近い。

安曇野はそんなところなのだ。ここのところ毎日、酷暑のニュースを新聞やテレビで見聞きしながら、つくづくそう感じる。

各地で40度に迫りそうな暑さが記録されているという。テレビでは全国ニュースでアナウンサーが緊迫感をただよわせた声で警戒を呼びかけている。

「命の危険がともなう暑さです」

「がまんせずにクーラーを使いましょう」

「運動は控えましょう」

なんだか大変なことになってるなあ。

もちろん安曇野だって夏は暑い。さすがに7月の後半は日中30度を超えている。けれども、朝は20度くらい。午後には少しくーラーを使うことがあるけれど、毎日ではない。日が傾くと、昼間の熱気も嘘のように引いていく。ヒグラシの声があちこちから聞こえ、さわやかな風が吹き始める。雑木林を抜けて熱気を奪われた涼気が窓から家の中に広がる。熱帯夜もない。クーラーなしでも寝苦しくはない。

夏がこんなにも快適な季節であることは安曇野で知った。

上京すると、肌にまとわりつくような熱気と湿気にうんざりしてしまう。帰るとほっとする。東京で暮らしている人に申し訳ないと思う。でも、その気持ちには、遠い地獄を、極楽にいながらのぞき込むようないびつな満足感も混じっていて……。

それはさておき、これまでさまざまところで夏を経験した。

暴力的な猛暑をはじめて経験したのは、30年近く前のカンボジアだった。あの国を壊滅的な状況においやった内戦がようやく終わろうとしていた。タイ国境近

くの大規模な難民キャンプに取材に入った。炎天下だった。時間が限られていたので文字どおり広いキャンプの中をあちこち走り回った。

そのうち、動悸が激しくなり、頭も痛くなった。熱中症？あわててペットボトルの水を大量に飲んだ。水に浸したタオルを頭に寄せたけれど、すぐに乾いてしまう。なんとか無事に仕事は終えたけれど、その日から数日、体力が戻らなかった。あれ以上の暑さはその後も経験したことがない。いったい何度だったのだろうか？

フランスの夏は、ランボーの有名な「感覚」という詩のイメージが先にあった。

夏の青い黄昏に、ぼくは小道を歩きだす
麦の穂にさされ、細い草をふみながら
ぼくは、夢見心地でそのさわやかさを足に感じる
風が、帽子をかぶらない頭をなでていくままにして

この「青い黄昏」をきわめて詩的な表現と思っていた。けれど、パリで夏を過ごしたとき、黄昏時はほんとうに青い空気に包まれるのだと知った。実際の夏が詩的だった。

ところが2003年、同じ街で逃げ場のない暑さを経験することになる。サハラ砂漠上空の熱い空気がフランス上空に居座ったのだという。

暑さにパリは無防備だった。そのころはクーラーが普及していなかったのだ。レストランでも商店でも事務所でもめったに見ない。それまでは不要だったからだ。

もちろん住んでいたアパルトマンにもなかった。石造りなのでひんやりしているはずが、昼間に熱を帯びたまま冷めない。水のシャワーを浴びてもすぐに汗が噴き出す。「冷房完備」を掲げたカフェに入っても涼しくない。例年になく長時間の酷使に耐えかねて、クーラーは早くも故障していた。

ようやく映画館がクーラーを備えていることに気づき、飛び込んだ。なにを見たか忘れたけれど、あのときの安堵感は今も覚えている。

その後、異例だったはずの猛暑の夏が何度もパリを悩ませることになっている。今年もひどいようだ。東京の夏もこれからますます暑くなっていくのだろうか。

そんなことを考えていると、ニュースが東京での新築タワーマンションの人気ぶりを伝えていた。窓から一望できる東京湾の絶景が売りみたい。猛暑の夏は冷暖房完備の部屋から海を見下ろすのかしら。不快感が広がる大都会で、快適な空間をなんとか作りあげようとしているみたい。

そこまでしなくても、極楽なら、そこから電車で3、4時間のところにありますよ。住居費も食費もずっと安い。

(団友・後援会員、元朝日新聞記者)



■輝くばかりの緑と赤いタチアオイの花。家の窓から見える夏
(写真と説明：筆者)